

重慶市青少年交流訪問団 報告書



令和6年7月8日(月)- 7月13日(土)

公益財団法人水戸市国際交流協会

目 次

はじめに	1
訪問都市のプロフィール	2
団員名簿	3
経路図	4
日程表	5
行動の記録	6
団員報告書	22
団員への質問	44
資料編		47
(1) 水戸市と重慶市の交流	48
(2) 友好交流都市提携合意書	51
(3) 訪問団員募集チラシ	52
(4) 訪問団員募集要項	53

はじめに

水戸市と中華人民共和国重慶市は、2000 年に友好交流都市の盟約を締結しました。以来、相互に訪問を重ね、友好を深めてきましたが、2020 年以降、新型コロナウィルスの世界的な流行により、直接的な交流ができない時期が続きました。

2024 年に入り、重慶市は「@重慶@世界『継承と革新、手を携えてともに前進』日本友好都市青少年交流活動」と題する青少年交流事業を企画しました。重慶市は日本の 2 つの都市と友好交流を続けています。ひとつは水戸市であり、もうひとつは、1986 年から重慶市と友好都市提携をしている広島市です。今回の事業は、重慶市の費用負担により、水戸と広島、2 都市の青少年をご招待いただき、重慶市内施設等の見学を行うとともに、重慶市内の学生等との交流を図るというものでした。ご招待を受け、水戸市では重慶市青少年交流訪問団を募集し、14 名の青少年を派遣することとなりました。

重慶市滞在中は、重慶市政府外事弁公室の皆さまをはじめ、四川外国语大学、南開中学校、永利村の皆さまに心よりのおもてなしをいただきましたとともに、日本と中国の友好都市の若者たちが交流し、お互いの国や都市、人々のことについて理解を深めるこの上ない機会を提供いただきました。この交流事業を通じて、水戸市と重慶市、両市の友好を深めることができたばかりでなく、重慶市と友好関係にある広島市との交流を持つこともでき、また団員それぞれにとっても、将来に向けての糧となる貴重な体験の場となりました。

この報告書は、今回の訪問の記録や、団員それぞれが覚えた感懷を文章として綴ったものであり、またこの報告を通して、訪問実現のためにご尽力くださいました重慶市の関係者の皆様に感謝の意を表するものであります。

訪問都市のプロフィール

重慶市

人口約 3200 万人（水戸市の約 120 倍）を誇る、中国最大の都市。1997 年に四川省から独立し、北京・天津・上海に続く 4 番目の直轄市（省と同格）となりました。中国西南部最大の商工業の中心地で、長江上流の経済の中心地です。市街区は長江と嘉陵江の合流地点にあり、四方は山に囲まれ、山城、江城、霧の都、とも呼ばれます。



1985(昭和 60)年、孫平化中日友好協会副会長(当時)が水戸市を訪問したことをきっかけに、相互に訪問を重ねました。とりわけ 1993(平成 5)年に水戸市で開催された第 10 回全国緑化フェアに、重慶自然博物館所蔵の恐竜化石の出展を重慶市に要請し、重慶市人民政府や中国国家文物局などの支援を得て水戸市が出展した「恐竜館」が多くの入場者を集めたことを契機に両市の人的交流が進みました。

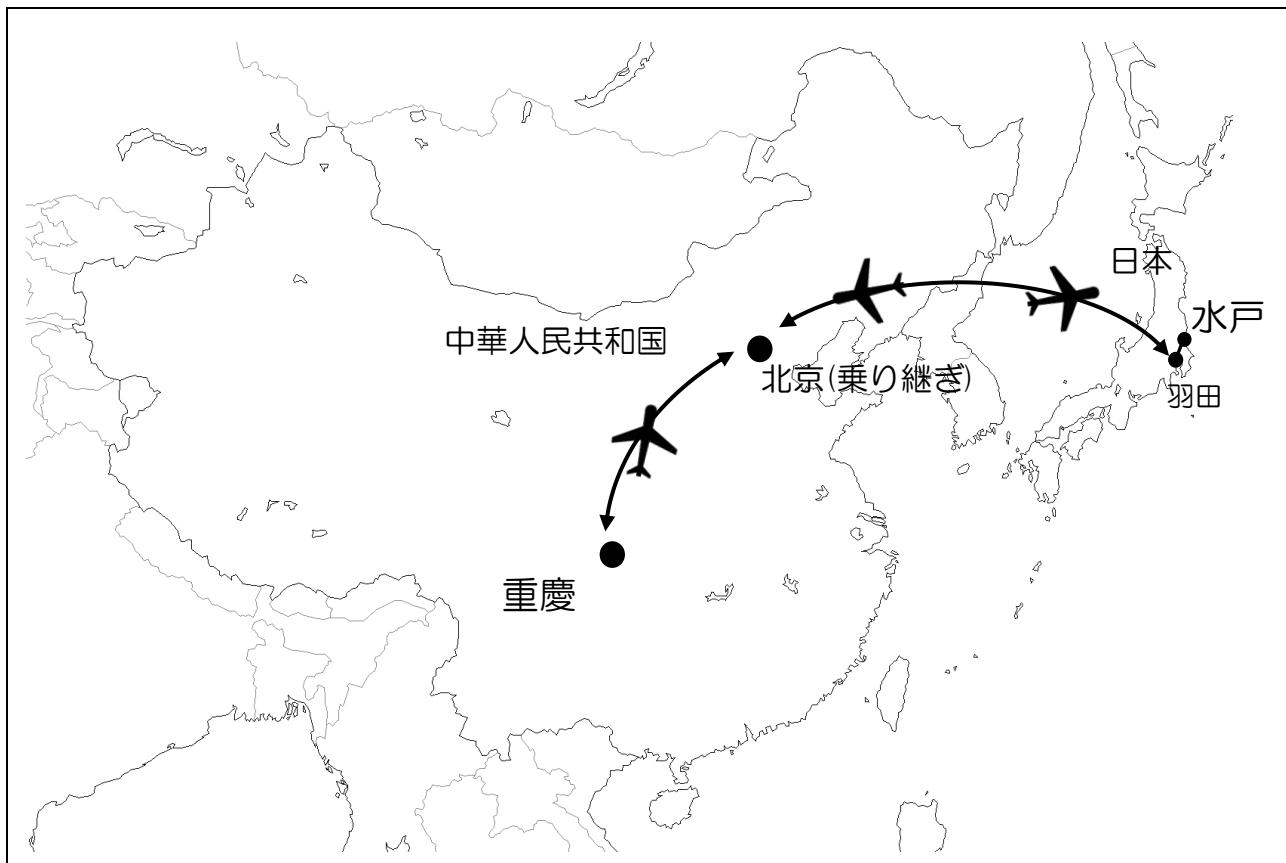
1999(平成 11)年の重慶市からの訪問団が水戸を訪れた際、それまでの交流の経緯を踏まえ、西暦 2000 年の節目に友好関係を締結することが提案され、2000(平成 12)年 3 月、市議会定例会の本会議で、友好交流都市提携についての議案が満場一致で可決されました。同年 6 月に岡田広市長(当時)を団長とする使節団が重慶に派遣され、友好交流都市提携合意書の調印が行われました。それ以降、相互に訪問団を派遣するなど交流が続けられています。

重慶市青少年交流訪問団 団員名簿

(敬称略)

団員	とがし ゆきなり 富樫 幸也	高校生
団員	よう み さ 楊 海沙	社会人
団員	のはら ゆず 野原 ゆず	大学生
団員	くらさわ まさき 倉澤 正樹	社会人
団員	やす たくみ 安 拓巳	社会人
団員	すずき みなほ 鈴木 南帆	高校生
団員	せきね めぐみ 関根 芽実	大学生
団員	いわた よしひこ 岩田 由彦	社会人
団員	おおまがり あゆみ 大曲 歩美	社会人
団員	やない れん 矢内 蓮	大学生
団員	ふじい ゆうだい 藤井 雄大	大学生
団員	おおの よしひさ 大野 勝悠	高校生
団員	わたなべ ゆか 渡邊 夕夏	社会人
団員	ねもと たかあき 根本 貴彬	社会人
随行	おう い あ 王 偉亜	国際交流協会シニアアドバイザー
随行	たけうち しげる 竹内 繁	国際交流協会

【経路図】



重慶市青少年交流訪問団　日　程

日次	月日(曜)	現地時間	交通機関	行　程
1	7/8 (月)	7:50 8:05 11:00 14:00 16:40 18:30 21:20	市バス CA182 CA1449	水戸市役所集合 水戸市役所発 羽田空港着 羽田発→北京へ(所要約3.5時間) 北京首都国際空港着 北京→重慶へ(所要約3時間) 重慶江北国際空港着→ホテルへ <重慶泊>
2	7/9 (火)	10:00 12:00 14:00 16:20 17:20 20:00		重慶市規劃展覽館：見学 重慶市外事ビル：歓迎昼食会 三峡博物館：見学 重慶大爆撃遺跡：見学 十八梯民俗風貌街：見学・夕食 夜景観覧 <重慶泊>
3	7/10 (水)	10:00 11:50 13:00 15:30		在重慶日本国総領事館：総領事と面会 重慶内陸物流ハブ展示センター：見学 磁器口老街：散策・昼食 四川外国语大学：交流セミナー・夕食会 <重慶泊>
4	7/11 (木)	8:22 9:40 10:25 11:15 14:20 16:04 17:30	高速鉄道 車 高速鉄道	重慶北駅発 万州駅着 永利村サービスセンター：見学 旧永利村小学校：ビワの葉茶、藍染め体験、昼食 張飛廟：見学 雲陽駅発 重慶北駅着 <重慶泊>
5	7/12 (金)	9:00 10:50 13:45		重慶市動物園：見学 賽力斯（セレス）自動車工場：見学 南開中学校：見学・中華料理体験・お別れ会 <重慶泊>
6	7/13 (土)	8:15 11:55 14:55 17:50 21:40 23:00 1:10	CA4135 CA183 市バス	ホテル発→重慶江北国際空港へ 重慶発→北京へ(所要約3時間) 北京首都国際空港着 北京発→羽田へ(所要約3時間) 羽田空港着 羽田空港→水戸へ 水戸市役所着

※利用航空会社：中国国際航空（CA）

※宿泊施設：Dekin Hotel Chongqing Jiefanbei（重庆解放碑帝晶酒店）

行動の記録



四川外国语大学にて

1日目

7月8日(月) 水戸市 ⇒ 重慶市

7:50 水戸市役所 集合
8:05 水戸市役所 出発
11:00 羽田空港 着
14:00 羽田発(CA182便)
昼食【機内食】
-----<時差-1時間>-----
16:40 北京首都国際空港 着
18:30 北京発(CA1449便)
21:20 重慶江北国際空港着
22:30 ホテル着(重庆解放碑帝晶酒店)



水戸市役所から市のバスで羽田空港へ



航空会社のカウンターでチェックイン



北京空港で乗り継ぎ
入国審査に時間がかかり、搭乗時刻まであとわずか！間に合うか？
広すぎる空港内をモノレールで移動



重慶に到着し、重慶市のバスでホテルへ
夜景が美しい！



ホテルのロビーにて

2日目

7月9日(火) 市内見学・歓迎昼食会

- 9:45 ホテル発
- 10:00 重慶市規劃展覽館
- 12:00 重慶市外事ビル(歓迎昼食会)
- 14:00 三峡博物館
- 15:40 季子壠駅
- 16:00 重慶モノレール2号線にて較場口駅へ
- 16:20 重慶大爆撃遺跡見学
- 17:20 十八梯民族風貌街見学・夕食
- 20:00 夜景見学



重慶での全行程に同行してくださった、四川外国语大学院生の馬婧さんと孫巧霧さん



ガイドの王建国さん

重慶市規劃展覽館



重慶市の都市計画と開発の現状について知ることができる展示施設

歓迎昼食会



馮子敏重慶市外事弁副主任
通訳は徐星さん(外事弁公室)



さんきょう 三峡博物館



重慶のある巴蜀地域の歴史や文化、三峡の自然に関する展示を見ることができる



三峡博物館の正面
にある人民大礼堂

重慶モノレール



ビルの中をモノレールが通り抜ける李子壩駅



重慶大爆撃遺跡



爆撃後の街や防空壕の様子が再現されている



じゅうはっていみんぞくふうぼうがい
十八梯民族風貌街



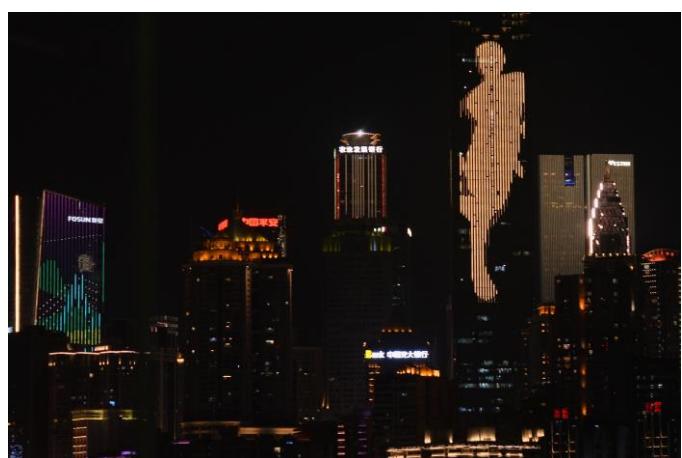
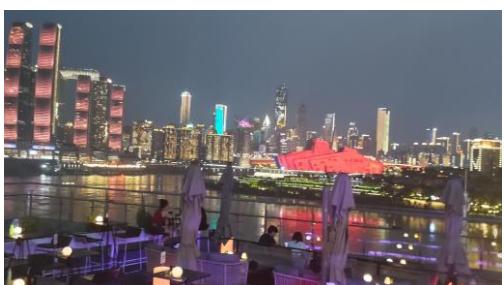
重慶の古い街並みを見学



重慶夜景



川岸から夜景
を楽しみました。



3日目

7月10日(水) 市内見学・四川外国语大学

- 10:00 在重慶日本国総領事館
高田真里総領事挨拶
大熊首席領事によるプレゼン:
在外公館の役割・日中関係における
民間交流の重要性等
- 11:50 重慶内陸物流ハブセンター見学
- 13:00 昼食(磁器口)
- 13:50 磁器口老街見学
変面等を鑑賞、散策
- 15:30 四川外国语大学
陳可冉副学長講義
広島市紹介
水戸市紹介
重慶市紹介
グループワーク／グループ発表
- 18:20 学食にて夕食会
- 21:10 ホテル着

重慶市内陸物流 ハブセンター



じきこう 磁器口

一帯一路の現在を紹介する展示を見学





重慶の古い街並みや、変面などのパフォーマンスを堪能

四川外国语大学



陳可冉副学長の講義

広島市紹介



水戸市紹介

重慶市紹介



9つのグループに分かれて、
グループワーク！
四川外国语大学の学生と、
水戸市・広島市のメンバーが
交流しました。



4日目

7月11日(木) 永利村訪問・張飛廟見学

- 7:05 ホテル発
8:22 重慶北駅発:高速鉄道で万州駅へ
9:40 万州駅着
王新さん(外事弁公室・永利村駐村活動隊第一書記)と合流
10:25 永利村サービスセンター見学
11:15 旧永利村小学校(体験施設)
ビワの葉茶作り体験
藍染め体験
昼食
13:15 バス移動
14:20 張飛廟見学
16:04 雲陽駅発(高速鉄道で移動)
17:30 重慶北駅着
18:00 ホテル着



王新さん(永利村駐村活動隊第一書記)

王新さんは、以前は重慶市外事弁公室の日本語通訳として、水戸市と重慶市の交流に携わっておられました。現在は、永利村の駐村活動隊第一書記として、村の発展のための様々な施策の陣頭指揮を執られています。そうしたご縁から、観光ではなかなか目にすることのできない、村の開発の様子の紹介や、閉校後に体験施設として再生した小学校での伝統文化体験活動をご提案くださいました。

重慶北駅



車内風景

万州北駅着→永利村へ



永利村サービスセンター



永利村の開発に関する映像や展示を見学



旧永利村小学校



ピワの葉茶作り体験



藍染め体験



小学校で昼食の重慶料理をいただく

張飛廟

三国時代の蜀の武将、
張飛を祀った廟を見学



5日目

7月12日(金) 市内見学・南開中学校

- 9:00 重慶市動物園見学
- 10:50 賽力斯(セレス)自動車工場見学
- 12:40 昼食(重慶火鍋)
- 13:45 南開中学校(日本の高校相当)着
- 13:50 歓迎会
- 14:30 学校施設見学
- 15:00 学食にてワンタン作り体験
- 16:00 芸術館ホールにてパフォーマンス
トランペット独奏
広島:日本文化「折り紙」の紹介
水戸:みとちゃんダンス
南開中学:伝統舞踊
- 17:00 ホテルへ(広島市一行は帰国の途へ)
- 18:00 ホテル着後、夕食

重慶市動物園



賽力斯(セレス) 自動車工場

残念ながら工場内の撮影は禁止でしたが、最新車種の展示サンプルで座り心地を体験。また組み立ての様子などを見学することができました。



昼食：重慶火鍋



南開中学校



実験施設、南極に関する展示、飛行機のシミュレーターなどもある、充実の校内設備

ワンタン作り



グループに分かれ、生徒たちと交流しながら、協力してワンタン作り



南開中学校：芸術館ホール



肖力校長あいさつ



広島市:日本文化「折り紙」の紹介



水戸市:みとちゃんダンス



南開中学校:伝統舞踊

6日目

7月13日(土) 重慶市 ⇒ 水戸市

8:15 ホテル発
8:45 重慶江北国際空港着
11:55 重慶発(CA4135便)
14:55 北京首都国際空港着
17:50 北京発(CA183便)
-----<時差-1時間>-----
21:40 羽田空港着
23:00 羽田発
1:10 水戸市役所着



重慶江北国際空港



北京首都国際空港



羽田空港着→水戸へ

団員報告書



磁器口にて

重慶訪問を通しての感想

富樫 幸也

今回の水戸市と重慶市の交流に参加して、驚いた点が多かった。特に、僕は現在高校2年生なので、中国の高校生のスケジュールを聞いて、驚いた瞬間が多かった。

中国の高校生は、朝6時から夜10時過ぎまで勉強している。中国国内の激しい受験戦争に打ち勝つためである。今回の交流で会った生徒は皆さんスーパーエリートで、そのスケジュール

が当然だと思っている人が多かったように感じられた。特に、最終日に訪問した南開中学校の生徒と話した際に、僕はこのスケジュールが大変だと感じているかを聞いた。しかし、その生徒は大変さを感じておらず、自分たちの学校生活を楽しんでいる様子だった。僕は、正直言ってしまうと、この過酷なスケジュールを聞いて自分には無理だと感じた。日本の甘い受験さえも自分にはきついと感じてしまっているのに、それの倍以上勉強するということは、自分には考えられない所業だった。その上、出会った全員が芸術や運動などの課外活動に参加していて、何度も驚かされた。

もう一つ驚かされた点としては、重慶市のおもてなしのすごさだ。初日から最終日まで、宿泊させていただいたホテルや、外事弁公室でいただいた中国の郷土料理などなど、幅広くおもてなしをしてもらった。自分は中国へ行く前は、反日感情を持つ人が少なからずいるのではないか、快く受け入れてはもらえないのではないかと少し不安を抱いていた。しかし実際には、すべての人々が温かく、現地の人、スーパーやお店などに行っても、嫌な目で見られることはなく、ただ中国語が使えない外国人だと捉えられていたので安心した。日本人の多くは外国人が来日していると、少し距離を取ったり、言葉が通じないからと、避けてしまうように感じるので、そこが日本人が改めるべき今後の課題ではないかと思った。

今回、自分は母親に勧められてこのプログラムに参加したが、母から言われるまでこのようなプログラムがあることを知らなかった。学んだり体験したりできるチャンスは、気付かないところに多くあるということを感じた。今回の経験が今後の人生に生きるように行動するとともに、自らチャンスを拾っていけるように、アンテナを高くして、活動していきたい。



重慶訪問で感じたこと

楊 海沙

行きの飛行機が重慶上空にて着陸態勢に入ったとき、目に飛び込んできた夜景に圧倒された。何重にも重なり複雑に交差する道路、色とりどりに光り輝く高層ビルの数々。都市としての発展ぶりに目を見張った。私はこれからここに降り立つかという高揚感を覚えた。

翌日、重慶市規劃展覽館にて重慶の地理と都市開発計画の詳細を見ることができた。重慶は山と川に挟まれ起伏に富んだ特徴的な地形となっており、それを生かした非常に計画的かつスピーディーな都市開発がされていると感じた。地下鉄の下に駐車場や道路があり、都市空間を水平方向のみならず垂直方向にもここまでくまなく有効活用しているのかと驚いた。また、地形の区切りごとに推進産業のゾーニングを行い、最適な配置で産業振興を行っていることにも感心した。

街中を歩いていても、一つ一つの建物の建築デザインに特徴があり、さらにモノレールが建物に突っ込む光景も見られるなど、非常に柔軟な街づくりがされていると感じた。すべての光景が新鮮で、とにかく散歩が楽しく、街として非常に魅力的であると思った。

都市部だけでなく、農村部の開発も効果的に進められていた。雲陽県に位置する永利村を訪問し、農村の貧困対策について学んだ。ひわが特産品である永利村はもともと貧しい村であったが、都市部の優秀な役人を派遣して、運送道路の建設、専門家による農業指導、ライブコマースの導入による中抜きの排除、加工産業の確立といったサプライチェーン改善の施策で効果を上げていった。その後も養豚場や有機肥料の工場の建設による企業の誘致も行い、村全体の収入を上げて公共サービスの充実に繋げている。もちろんどちらも課題解決に直結する的確な施策ではあるが、その実現には財政面、スピード感、住民の協力を得られるかといったハーダルがある中で、結果を出すに至ったのは、中国共産党による中央集権的な統治や莫大な投資、ライブコマースといったビジネスモデルの先進性があつてこそだと感じた。また、村のコミュニティ強化のために、ボランティアとして協力してくれる住民にはポイント付与するといったインセンティブ付けの仕組みも面白く、地域振興にはこのような柔軟な発想が必要だと感じた。今回



の訪問を通じて、中国の急速な経済発展を支えているものをこの目で確かめることができたのは非常に貴重な体験だったと思う。

重慶に行くのは初めてであったが、親戚訪問のために上海は毎年訪れており、中国の都市部には行き慣れているという認識で、正直、今回重慶に行く前は果たして新鮮味を感じができるだろうかと思っていた。しかし、今回の訪問は新たな気づきや驚きに溢れており、中国という国における地域ごとの多様性を実感するとともに、スケールの大きさとスピード感を再認識することができた。中国には私の知らない世界がまだたくさん広がっているのかと好奇心をくすぐられ、今後も中国の様々な地域を訪れて見識を深めていきたいと思う。

最後に、このような数々の貴重な体験をする場を設けてくださり、手厚くもてなしてくださり、親切に接してくださった重慶市外事弁公室職員、ボランティアの四川外国语大学の学生をはじめとする、重慶市の皆さんに心より感謝を申し上げたい。

中国の方々との出会い

野原 ゆず

＜応募したきっかけ＞

私は今年の春、大学に入学し、かねてから中国の文化や中国語のきれいな発音に興味があり、中国語を第二外国語として選択をしました。

その授業を担当する王先生から、「重慶市青少年交流訪問団員」の募集について教えていただきました。このような機会はなかなかないと思い、応募をして訪問団員に選ばれました。

＜中国での優しい人々との出会い＞

中国での優しい人々との出会いが6つありました。

1つ目は、飛行機で座席が隣になった中国の方との出会いです。初めての海外フライトで緊張していた私に、お水の置き場や機内食の食べ方を教えて下さいました。帰り際に「謝謝」とお礼を伝えると、「重慶市に来るのは初めてですか?」と中国語と英語で話しかけていただきました。「初めてです。」と答えると、「Welcome!」と歓迎の言葉をかけて下さり、私は緊張がほぐれたのでした。

2つ目は、料理店の方々です。どこに行っても盛大な歓迎をしてくださいました。食べきれないほどの豪華なごちそうや果物、彩りも鮮やかでとてもおいしく、おもてなしの精神に感動しました。

3つ目は、四川外国语大学の学生の方々との出会いです。四川外国语大学の皆さんの中でも上手で驚きました。特に発音がすごくきれいで、日本人だと勘違いしてしまうほどでした。中国語は日本語に比べ、たくさんの母音と子音があるということが関係しているのではないかと思いました。また学生の方々の勉強熱心で真面目な姿勢にとても感動し、私たち日本の学生も見習わないといけないと感じました。

4つ目は、永利村に住んでいる方々と職員さんとの出会いです。永利村の方が、藍染めやビワの葉茶作りを私たちに親切に教えて下さいました。日本ではなかなかできない体験で、とても貴重な時間に感じました。

5つ目は、ホテル近くのお土産屋の店員さんとの出会いです。夜の自由行動でお土産を買いに行ったとき、お店の方がとても親切にして下さり、感動で胸がいっぱいになりました。私は中国語が話せないので身振り手振りと、スマホの翻訳アプリで会話をしたのですが、店員さんはまっすぐ私の目を見て下さり、話しているうちに意気投合しました。試食させてくださったり、丁寧なおもてなしをして下さったり、今でもそのことを思い出すと温かい気持ちになります。



6つ目は、私たちを引率してくださったガイドさんとの出会いです。ガイドさんはわかりやすい日本語と、優しい笑顔で私たちを案内してくださいました。ガイドさんの言葉を通じて、重慶市の文化や歴史、食べ物などを学ぶことができ、この訪問がとても良い思い出になりました。

＜この訪問で得たこと、学んだこと＞

街の建物、文化遺産などすべての規模が大きく、成長し続ける重慶に驚きました。また、どこを訪れても初めて見る素敵な風景は、私の心を躍らせました。特に永利村の景色は、昔見た水墨画のような幻想的な風景で印象に残りました。また、街の夜景は、古い建築物と近代的な建物が融合して鮮やかに光っていて、強く心に残りました。

「百聞は一見に如かず」という言葉があるように実際に重慶市を訪れ、感じることができて本当によかったです。

また言葉がわからなくても、文化が異なっても、人と人は気持ちが通じ合うことができるということを学びました。

これからもお互いに尊敬の気持ちを忘れることなく、一期一会を大切にしながら交流を深めていきたいです。



重慶市を訪問して感じたこと、青年による国際交流事業について思うこと

倉澤 正樹

重慶市は経済成長のみならず、成熟した社会を目指して、絶えず変化している。

例えば、繁華街や観光地では、「新中式」と呼ばれるスタイルが流行しつつある。「新中式」とは、中国の伝統文化を素地としつつ、これを現代の生活スタイルに調和させ、新しい文化を創り出す理念のことらしい。私たちの訪問プログラムを支え、もてなしてくださった重慶市外事弁公室の徐さんは、フォーマルな場で「新中式」を着こなしていらっしゃった。街中のドリンクスタンドの看板にも、「伝統的なお茶の味に力を入れました！」という意味で、「新中式」の売り文句が目を引く。香り高いお茶の味が、クリームの甘味によって引き立つように仕上がっていた。今回、私たちは重慶市の南開中学校（中高一貫の六年制）を訪問した。国際部の高校2年生が、広い校内を案内してくださったのだが、正直、皆さんの英語の流暢さに、舌を巻く思いであった。ある生徒と、以下のような会話をした。

「授業は何時から何時までですか？」

「朝の6:30から夜の10:30までです」

「すごい勉強量ですね。学校生活は楽しいですか？」

「きついですね。ついていくだけで精一杯です。先生も厳しいです」

「そこまで努力されている皆さんでしたら、進学先も一流の大学でしょう」

「国際部からは毎年、ハーバード大学やスタンフォード大学などに進学する生徒がいます」

「本当にすごいですね！」

「ですが、北京や上海にはもっと良い学校があります。私たちはまだまだです」

これだけ勉強してなお、謙虚かつ真摯な姿に私は感動を覚えた。南開中学校は理科の実験施設や、各種各様の芸術施設の充実が著しく、無形の文化的・学術的価値に投資できる豊かさを備えている。生徒の舞台発表も、西洋クラシック音楽と中国伝統舞踊であったが、長時間の勉強の合間に練習しているのだと思うと、あまりの完成度の高さに驚いた。

南開中学校では、生徒たちが受け身ではなく、自らの意志でよく奮闘している。現に、日本の訪問団員の中からも、「こんな素晴らしい教育環境が与えられたら、私は無限に頑張れそう！」という声が上がった。過酷な受験競争を勝ち抜くためだけの詰め込み教育ではなく、幅広い教養を備えた英才を育てるための教育を意図しているのだ。

そして、私たちは成熟した社会を目指す象徴的現場として、重慶市内の農村部である雲陽県を視察した。ビワの葉を原料としたお茶の葉作りや、藍染体験をし、お昼ごはんには地産地消のご



馳走をいただいた。雲陽県には、重慶市外事弁公室などから共産党幹部が改革部隊として送られ、道路をはじめとするインフラを整備し、農作物の高付加価値化・六次産業化を地域ぐるみで進めている。これは、貧しい農村部の生活水準を向上させ、みんなで豊かになろうとする、まさに成熟した社会に至る道である。このように語る永利村駐村活動隊第一書記の王さんは、日本語で私たちへの案内をしつつ、ご自身のお子さんの面倒もみていた。時にマジックなどであやしながら、お子さんに優しく微笑みかける王さんの姿に、仕事と家庭を両立させる共産党幹部の素顔を見た。

青年による国際交流事業の意義は、まだ頭と心が固まりきっていない青年が、現地で率直に交流し、偏見から解き放たれた友情を結ぶことにある。今回、重慶市の方々の友情に触れた私たちが、今の大人の想像を超えた、新しい未来を創っていくのだ。

末筆ながら、今回の事業を支えてくださった大人の皆さんに、心より御礼を申し上げる。



重慶-歴史と未来が重なり合う都市-

安 拓巳

重慶市は市と言いながら、北海道とほぼ同じ面積で、人口は東京都の2倍以上の3200万人を誇る、世界最大の都市の一つである。

重慶市規劃展覽館・重慶三峡博物館では、中国の国家政策である「一带一路」について説明を受け、重慶市が長江とともに歩んできた歴史について見識を深めた。

重慶は日中戦争時に臨時首都が置かれた場所として日本史で扱われるが、当時の日本軍はその首都機能を破壊するため、重慶に対して緜幕爆撃を行った。突然の爆撃により、防空壕に許容人数以上の人人が押し寄せた結果、中では窒息死や圧死者があふれかえったという。中国ではその惨事を、日付けから「六五惨事」と呼んでいる。今回訪問した重慶大爆撃遺跡は、その防空壕を改造して公開されたものである。戦争の悲惨さを訴える角度が日本とは全く違う体験型の戦争施設は、胸に迫るものがあった。

今回の訪問は友好都市の訪問であったため、待遇は格別であった。通常では訪れる事はまずできない重慶市外事ビル（市の外務省のようなもの）や、重慶市総領事館の表敬訪問。中国高速鉄道の乗車や、共産党が直轄で村おこしをしている永利村への視察。特に永利村では、日本人が初めて訪れるということで、中国の多数のメディアが随行した。現在、中国が注力している賽力斯（セレス）自動車工場の視察では、一般人は立ち入れない組み立ての様子を見学することができた。1000万円クラスの高級電気自動車が、中国では飛ぶように売れているらしい。

四川外国语大学・重慶南開中学校では、最先端の教育事情を視察できた。特に、南開中学校（日本の高校に相当）はハーバード大学に何人も生徒を送り出している超進学校であり、校内にはパイロット養成のためのフライトシミュレーターや、南極を学習する施設など、高校とは思えない設備の数々が並んでいた。

重慶市は「一带一路」の起点となる地域であり、西はオランダのロッテルダム、南はインドネシアのジャカルタまでを結び、かつての中国王朝の繁栄に貢献したシルクロード・マリンロードを再び実現しようとしている。重慶内陸国際物流ハブ展示センターでは、広大なコンテナヤードやどこまでも続く線路を視察することができた。中国共産党による統治が隅々まで行き届いているため、開発のための土地の接収が極めて容易なことが、この素早い開発に結びついている。用地確保やスピード感等、日本ではまず不可能な開発である。

現在、日本と中国は互いに渡航者ヘビザの発給を必要としており、政治的にも微妙な関係が続いている。このような青少年での交流や民間レベルでの関わりをお互いに続けていくことで、良き隣人であり続けたいと考える。



重慶市の繁華街洪崖洞を見上げる



張飛廟から低く立ちこめた雲と長江を望む

重慶訪問を終えて

鈴木 南帆

私たちは、重慶市規劃展覽館で、重慶市はたくさんの山が連なり、それによって盆地になっていることや、川の本数が多いこと、そして市街地がどのように密集しているのかなどを、重慶市の地形を再現した展示で知ることができました。また、この展覽館の見学と日々の移動を通して、重慶の道路がとても複雑である事を知りました。地形や交通に日本との違いがあり、とても勉強になり良い経験になりました。

今回の訪問では、特に重慶市の歴史に触れる機会が多く、とても勉強になりました。重慶三峡博物館や雲陽張飛廟では、貴重な展示物をたくさん見ることができました。そして重慶大爆撃遺跡では、当時何が起きたのか、またその被害の大きさを知り、日本人が当時したことの恐ろしさを感じました。

十八樓民族風貌街や磁器口老街の街並みからは、重慶市の文化的な雰囲気を感じることができました。また、永利村ではビワの葉茶作りと藍染体験という貴重な体験をさせていただきました。

四川外国语大学と南開中学校の学生の方々との交流は、日本との学校生活の違いを感じましたが、恋愛の話で盛り上ること、同じ趣味を持っていることなどの共通点があったので、異国人という心の壁がなくなったように思いました。

私は今回の重慶市訪問を経て、その土地、歴史、文化、そして重慶の人々の温かさを知ることができました。これはとても良い経験になり、これから活動に活かしたいと思いました。



重慶市を訪問して感じたこと

関根 芽実

重慶市に着き、夜景の美しさに息を飲んだ。重慶市訪問の6日間は、驚きの連続だった。例えば、建物のライトアップがプロジェクションマッピングのようだったこと、モノレールが建物の中を通過すること、1階にいたつもりが、案内図の表記では地下になっていること（重慶マジック）などだ。訪問前まではメディアを通しての情報によるイメージに偏っていたが、実際に現地の方と交流し中国へのイメージが変わるきっかけになり、重慶市についてさらに詳しく知りたいと思うようになった。

重慶訪問で印象的だったのは、教育設備の充実と学習意欲の高さだ。訪問団一行は、四川外国语大学と南開中学校を訪れた。四川外国语大学の紹介と広島市の紹介、水戸市の紹介を終えた後、学生の方とグループディスカッションの時間があった。とある学生が紙を見せてきて、紙には以下のようなことが書かれていた。

「こんにちは。僕の名前は〇〇です。大学1年生です。日本語を勉強し始めたばかりなので、質問するとき紙に書いていただけますか。」

平仮名や文法が適切で読みやすく、グループディスカッションが始まる前にそのことを伝えてくれる気づかいに感嘆した。大学3・4年生の参加が多い中で、他の学生に比べると日本語の学習年数が短いはずだが、日本語を使いこなしていて、日本語の習得スピードに驚いた。他の学生も言葉に詰まることなく、日本語を使いこなしている印象を持った。「日本語、お上手ですね」というと「いえいえ、とんでもないです。まだまだ勉強中です。」と口をそろえる。日本語を習得するために多くの時間を費やしているはずだが、そのことを自慢することなく、勉強し続けていることに感心した。

南開中学校では校内を見学し、博物館のような展示が施された教室や飛行機の操縦体験ができる教室など、充実した設備に驚嘆した。学生一人一人が勉強に集中し、探求し続けることができる環境が整っている印象を持った。

初めて重慶市を訪問し、現地の方々のやさしさに触れることができもう一度訪れてみたいと思うようになった。

末筆ながら、重慶市の皆様の歓迎と訪問に関わった方々に感謝申し上げる。



水戸市と重慶市の今後の発展と共に存について

岩田 由彦

水戸市と重慶市という、異なる文化や歴史を持つ二つの都市を比較して考えると、未来への展望が非常に興味深いものに感じられます。

水戸市は、歴史的な背景を持ちながらも、現代の課題に直面しています。特に、少子高齢化や人口減少は、地域の活力を奪う大きな要因です。しかし、偕楽園や水戸芸術館といった素晴らしい観光資源を持っていることから、観光振興に力を入れることで新たな活路を見出す可能性があると思います。地元の特産品を活かしたブランド化や、地域の魅力を発信することで、国内外からの観光客を呼び込むことができれば、経済の活性化につながるでしょう。

一方、重慶市は急速な経済成長を遂げており、製造業や物流業が発展していますが、その成長には環境問題や交通渋滞といった課題も伴っています。経済の多様化を進め、サービス業やハイテク産業にシフトすることで、持続可能な成長を目指す姿勢には感銘を受けます。特に、国際交流を強化し、一带一路政策に基づく連携を深めることで、さらなる発展が期待されるのではないでしょうか。



両都市の未来を考えると、共通するテーマが見えてきます。それは「持続可能性」です。水戸市は観光や地域産業を通じて地域の魅力を再発見し、重慶市は経済の多様化や環境保護を進めることで、持続可能な発展を目指しています。これらの取り組みは、単に経済的な成長を追求するだけでなく、地域社会や環境への配慮も含まれている点が非常に重要です。



私自身、これらの都市がどのようにそれぞれの課題に取り組み、未来を切り開いていくのかに大きな関心を持っています。水戸市の歴史的な魅力と重慶市の経済的なダイナミズムが交わることで、新たな可能性が生まれるかもしれません。両都市が互いに学び合い、協力し合うことで、より良い未来を築いていくことができると信じています。これから水戸市と重慶市の発展に期待を寄せつつ、地域の魅力を再発見し、持続可能な社会を目指す取り組みが広がることを願っています。

令和 6 年度重慶市青少年交流訪問団として重慶を訪問し感じたこと

大曲 歩美

重慶市はあらゆる面において目まぐるしい発展を遂げ、成長し続けている。

今回、令和 6 年度重慶市青少年交流訪問団として派遣された私たちは、重慶という都市をさまざまな観点から視察した。

まず、経済的観点である。今回視察した重慶市規劃展覽館や、重慶内陸国際物流ハブ展示センターでは、中国の重要な開発戦略である「一带一路」について学んだ。これは、かつての交易路「シルクロード」になぞらえ、中国から中央アジアを経由して欧州へつながる陸路を「一带一路」、中国を起点にして南シナ海からインド洋を通り欧州へ向かう海路を「一路」とする、中国と世界各国を結ぶ経済圏構想のことだ。特に重慶は、長江経済ベルトのハブとして、この戦略において欠かすことのできない重要な拠点となっている。重慶がいかに世界の物流を支えている都市であるかを目の当たりにし、感銘を受けた。

次に、地理的観点である。重慶三峡博物館では、自然や文化、古代史について知見を深めた。ここで特筆すべきは、その地形の独自性であろう。長江とその支流の嘉陵江を中心に発展した重慶は、山々に囲まれているその特徴的な地形から「山城」と呼ばれている。実際に、山間部に高層ビルがひしめき合う姿を眼前にして、その特異な地形は深く心に刻まれた。

そして、教育的観点である。今回、私たちは 2 つの教育機関を訪問した。外国語教育に長い歴史を有する四川外国语大学と、中高一貫の 6 年制である南開中学校だ。それぞれ、学生や生徒たちと日中双方の文化や日常生活について交流する機会があったが、教育という観点において、中国と日本で多くの相違点があることが判明した。たとえば、中国の多くの高校や大学では早朝 7 時頃から授業が始まり、夜 11 時頃まで自習しなければならないという。成熟した社会をめざし絶えず成長する中国、とりわけ重慶の未来を支え創造していく者たちの血のにじむような努力に、頭が下がる思いであった。一方、相違点だけでなく共通点も発見した。それは、方言についての話題だ。最近の重慶の子どもたちは、日本と同じで、小学校から既に標準語を話すよう教育されるため、方言を話すことができなくなってきたという。私が交流したグループでは、方言は守るべき文化のひとつであり、学び続けていく必要があるという考えで一致した。このように、より近い世代と交流し意見を交わし合ったことは、大変意義深いことであった。な



ぜなら、グローバル化の波によって今やどこに住んでいても多文化に接触せざるを得ない時代において、いかに人と人が交流し、互いの違いを受け入れ、理解し合い、価値観の違いを乗り越え協力していくことが、何よりも大切だと考えるからだ。そしてそれは、今後もますます重要視されていくであろう。また、教育機関に勤める者として、教育のあり方について改めて考えるという意味においても、今回の訪問は非常に有意義なものとなった。このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様に、この場をお借りして心からの感謝を申し上げる。

以上のように、令和6年度重慶市青少年交流訪問団として派遣された私たちは、さまざまな観点から重慶という都市について理解を深めた。結びとして、在重慶日本国総領事館を訪問した際にご講話をいただいた総領事である高田真里氏の、「日本と中国の交流には、政府当局間だけではなく多種多様なソフトパワーが重要な役割を果たす」という言葉を書き記しておきたい。国と国との外交はもちろん重要であるが、これから両国の将来を担う私たち一人ひとりが「外交官」となり、交流を深め関係を積み重ねていくことが、互いの友好関係を築き上げていくために何よりも大切なことがある。



「現地に行って見えた被害を受けた側からの景色」

矢内 蓮

重慶にある日中戦争の展示館を訪問しました。そこには、私たち日本人が教科書やメディアから学んできたような、攻撃をした側の視点から世間体を意識して描かれた歴史からでは認知できないような、壮絶な被害を受けた側の視点からの重慶爆撃が、事細かく、生々しく表現されていました。

私は祖父が現在水戸市在住ですが、水戸の内原には、満蒙開拓青少年義勇軍に関する郷土資料館があります。開拓の為に中国、大連に渡った後に戦争が激化し、16歳にして戦争に駆り出されて玉碎してしまったり、食糧増産のための開拓という大義を持って14歳から18歳で義勇軍に志願し入隊したものの、時の大臣の決断で戦争に加担させられたりした青少年たちの無念さを弔うとともに、史実を後世に伝えるための歴史資料館としてつくれられました。そこは国のリーダーの過ちとしての戦争を考える場でもあったため、見学したこと、日中戦争についてはある程度理解をしていたつもりでした。しかし、それはあくまで攻撃を行い、勝利を国民として歓喜した側である日本の輝かしい歴史の一部として、断片的に認知していただけだったということを理解しました。

被害者側の視点からは、次のような事実が語られます。重慶の家屋は建材が竹製・木製のものが多かったことに付け込んだ日本軍は、破壊力の最大化を期すべく、炸裂弾と燃焼弾を同時に投下しました。空襲警報が鳴らされると、市内の人々は慌てふためき、特に南岸・江北等の近郊から来た者は、川を渡って家へ帰ることができず、市内各地の防空壕に殺到するしかありませんでした。その結果、防空壕に避難する人数は普段より大幅に増えました。避難所の混雑等によって多くの人々が窒息死や圧死しました。このように、被害を受けた側からしか知ることのできない、決して風化してはいけない客観的な事実が、実際に防空壕を再現したエリアや、資料、ジオラマなどにより展示されていました。私たち戦争を直接経験していない世代にできることは、こういった資料館などを通じて、双方の立場から過去の出来事を客観的に正しく理解し、風化させないこと、そしてこれから世代にも正しく伝えることだと思います。今後、戦争を直接経験した世代が減っていく中で、過去に国の威信を背負って戦った人達を忘れないということはもちろん必要ですが、一方で被害を受けた側も存在し、お互い違った視点から歴史を理解しているということを認識することは重要だと思いました。



重慶市訪問を通じて学んだ新たな中国

藤井 雄大

私は今回の重慶市訪問を通じて、中国に対する印象が大きく変わりました。

重慶市に到着してからまず驚いたことは、中心部の夜景です。様々な色のライトが照らされている街並みは、日本にはない新しさとノスタルジックさのどちらをも感じさせるものでした。

また、重慶市の交通事情も非常に興味深かったです。道路の構造の都合上、1度でも道を間違えれば「半日重慶観光」をしなければならないと言われており、実際に展示館で道路のパノラマを見た際には、その立体的な構造に驚かされました。

また、重慶料理は非常に多くの油を使っており、日本で私たちが食べる中華料理とは全く異なっている点も、新たな学びでした。

前述の通り、様々な体験が私の持つ中国観というものに影響を与えてくれたのですが、最も印象に残っているのは永利村の訪問です。中国では、永利村のような農村地域に都市部の公務員や開発に携わる人を派遣し、農民の所得向上や新たな産業を生み出すプロジェクトが行われていることを学び、日本においても中国を参考にすべき点はあるのではないかと感じました。

中国について学ぶだけではなく、「水戸市」の魅力を発信していく立場としても、四川外国語大学や南開中学校の学生との交流は貴重な体験でした。中国語で書かれた水戸市のパンフレットを渡すと、多くの学生が私の街に興味を持って、「行ってみたい」と言ってくれたことが心に残っています。

今後もこの貴重な体験を生かし、他国との繋がりを学んだり、自分の国や地域の魅力を伝えたりすることに活かしていきたいです。



はじめての重慶

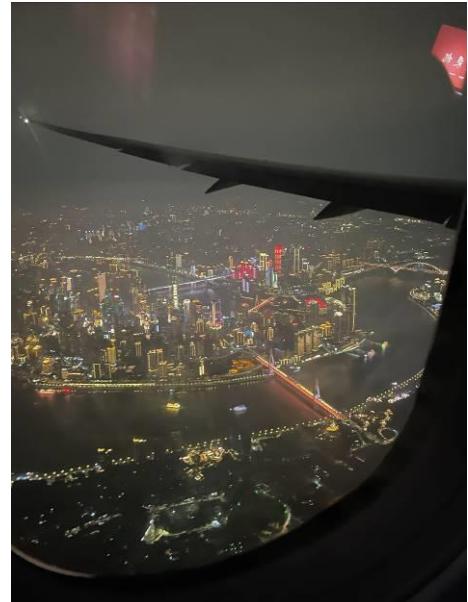
大野 勝悠

私は今回、一週間重慶市に滞在し、様々な経験をすることができました。羽田空港から北京首都国際空港へ行き、さらに乗り継いで重慶市に行きました。北京から重慶に行く飛行機で見た重慶の夜景は、一生忘れられません、日本の高層ビルより高く、ネオンの数も多く、曲がっているビルもあり、初日から日本で味わうことのない経験ができ、とても感動していたことを鮮明に覚えています。

今回、私たちのために、四川外国语大学で日本語を学んでいる学生が一週間、通訳などで同行してくれました。

バスに乗るとき、席が隣になった学生に、私が「何故日本語を学んでいるのですか」と聞くと、流ちょうな日本語で「アニメや文化が好きだからです」と答えてくれました。彼女が、私に「今回中国に来ようと思ったきっかけは何ですか」と聞き返してきたので、私は中国語で、「中国の文化や歌、そして食べ物が好きだからです」と答えると、中国語で返答してくれ、自分の中国語が相手に伝わり、とても嬉しかったことを覚えています。

四川外国语大学へ訪問した際は、学生の方々から積極的に声をかけていただき、日本の大学生と中国の大学生のスケジュールの違いや、重慶の紹介など、互いの違う文化についてたくさん話しました。



四川外国语大学交流の中で一番印象に残っているのは、グループで自己紹介をした時です。私は「音楽の『最炫民族風』や电视剧の『甄嬛传』が好きです。」と自己紹介したとき、同じグループにいた学生が、「よくその歌を知ってるね」「男性が甄嬛传見るんだ」など笑ってくれたり驚いてくれたことです。

最後にグループで話し合ったことを発表するとき、グループ代表の人が他のグループに、自分が最炫民族風や甄嬛传が好きなことを言うと、みんな笑ってくれました。恥ずかしかったけれど、そのおかげで「微信交換しませんか」など声をかけてもらい、距離が縮まってとてもうれしかったです。

四川外国语大学との交流以外に、重慶の食べ物がおいしかったことも思い出にあります。

「重庆小面」や「重庆火锅」、中国でよく食べられている鶏の足「もみじ」や、蛙なども食べまし

た。夜の重慶は本当に綺麗で少し歩くたびに景色が変わり、屋台や解放碑など、重慶はずっと賑わっており、とても楽しかったです。

今回、この様な機会に巡り合えたことを心から感謝申し上げます。



重慶市と水戸市の交流の輪を拡げていくために —6日間の訪問を通じて感じたこと—

渡邊 夕夏

このたび、重慶市政府から招待していただき、7月8日から13日までの6日間、訪問団として多くの経験をさせていただいた。個人的には、重慶市はもちろん中国への渡航も初めてであった。それまでの印象としては、漠然と「近くで遠い国」と感じていた。しかし、実際に訪問してみると、その印象は大きく変化した。重慶市の遙か何千年前から続く歴史、壮大で雄大な自然、個性的で色彩豊かな文化、情熱的で感情豊かな人々、目に映る都市の煌びやかな光景、肌で直接感じた街を包む夏の暑さと同じくらいの熱量と活気溢れるところが、最前線で中国を率いていく都市たる所以であることを伝えてくれた。

今回の訪問で学んだことは主に2点ある。

1点目は、重慶市の街に関する。重慶市は約3,200万人の人々が生活する、中国の中では最も人口が多い都市である。多くの生活者を支える立体的な交通網や先進技術を用いた街の構造について学ぶことが出来た。

2点目は、日本語を学ぶ学生たちとの交流と学びについて。普段の生活で重慶の学生たちと交流する機会はなく、初めてであった。彼らの学びに対する貪欲な熱量に胸を動かされた。

まずは「街」についてであるが、重慶市の都市の印象を一言で表すならば「近未来都市」である。例えば、道路は地上から地下まで何層にも重なっており、モノレール、車道、地下鉄といった異なる交通手段が、立体的に交差しながら敷かれていた。山々に囲まれた盆地という地形上、高低差の起伏が大きい街なだけに、トンネルや曲がりくねった道路が街を縫うように張り巡らされているのである。また、海かと錯覚してしまうような巨大な河川があるために、大小様々な橋も非常に多くみられた。そして、居住空間に関しては、中心市街地には高層マンションやおびただしいほどのビルが数多く立ち並んでいる。大都市の限られた土地の中で膨大な人数が住める街に住めるようにするためには、自ずと縦に向かって居住空間を形成する必要があるようだ。日本の首都である東京もビル街が立ち並ぶが、圧倒的に重慶市は数と規模感において、アジアの中でもトップレベルで抜きん出ているのではないかと感じた。

さらに、そのような世界をリードする都市、重慶の街を支える上で日本の技術が取り入れられていることも確認できた。例えば、ビルの中をモノレールが走る観光名所に関しては、ODA(政府開発援助)を通じて日立製作所が関わっており、既に撤退してしまってはいるものの、重慶のタクシーにはスズキの「アルト」が採用され、街中を走っていたという。重慶市と日本を結ぶ共通点が



重慶市を象徴する「人民解放牌」と賑わう広場

見られたため、現在の業務面でもつながるような新たな知見を得ることができた機会となった。

次に、学生たちとの交流について報告したい。後半の日程では、四川外国语大学の日本語学部の学生たちと交流を密にする機会が設けられていた。大学は山の中にあり、雄大な自然の中に拓かれた広場には大きな石彫のモニュメントが設置されていた。そこには、日本との繋がりを感じられる清少納言の『枕草子』の一節が彫られているのを発見し、国境を越えた異国の土地での日本文化との出会いに思わず嬉しくなった。学生の皆さんにはホスピタリティに溢れ、私たちを温かく歓迎してくれた。皆さん非常に勉学に熱心で聰明であった。我々訪問団は与えられた時間の中で、学ぶ動機や将来について、たくさんの話をした。水戸市はおろか、日本を訪れたことがない学生

がほとんどであったが、日本の音楽やアニメーションなど、日本のポップカルチャーに関心を持ち、日本語を学び始めた学生たちは多かった。学生たちはみな臆することなく日本語でコミュニケーションをとろうとしてくれていた。彼らの学びの延長にある、「卒業後、日本の企業に就職したい」という思いが強いからだそうだ。現在、中国国内では、特に文系の学生たちが就職難に陥っているという現状があるという。実際、学生時代に留学し、言語を習得したあとその国で就職する人が少なくないとのこと。私も学生時代に母国語以外の言語を専攻していたが、中国とは異なり、日本では外国語を学ばなくとも就職口は数多くある。しかし、彼らの場合、人口の多さゆえ、自国で就職する難しさが日本とはまるで大きく異なる現状にある。要因はそれだけとは言い難いが、限られた求人に対して一握りの優れた人しか採用されないという厳しい現実がある。交流を通じて感じた、学生たちの日本語能力と向上心の高さには、このような背景事情が関係しているものもあるだろう。私は日本語を母国語としない人向けに教えることのできる日本語教員としての資格を学生時代に取得したが、学生たちのように将来を見据えて生きようとして学んでいただろうかとふと我にかえった。重慶の学生たちの向学心を肌で感じ、私自身が学生時代に学んできることを今の環境でも活かし、地域の国際化に貢献したいという思いが再燃する機会となった。

最後に、今回の訪問にあたっては多数の方にご協力いただきました。重慶市政府の方々、水戸市国際交流協会の皆様、四川外国语大学の学生ボランティアの方々に改めて深く感謝を申し上げます。水戸市と重慶市の関係性を継続しつつ、より強いものにしていくためには、日常的に、それぞれの都市の良さをより多く発見し伝えていくこと、お互いの文化や言語を学ぶ機会を増やし、心の距離を縮めていくことが重要であると思います。そのような交流を通じ、両都市の友好関係が、国同士の末永い結びつきとなるように、私自身も今後の業務に邁進しながら国際貢献が出来る人材となれるよう努めていきたいと思います。



雄大な山々に囲まれた四川外国语大学の敷地にて

重慶訪問を終えて—お互いを理解し尊重し合う大切さ—

根本 貴彬

私は渡航前、地理的には隣国でありながら、中国のことを、どこか遠い国のように感じていました。しかし、今回の訪問を通して、日本と中国は、同じアジアの仲間であることを認識し、心理的距離は大きく縮まりました。

意外にも水戸と重慶には共通点が多いことを、今回の渡航で知りました。水戸の街は、那珂川と桜川の合流地点にある舌状台地の突端に水戸城が築かれたことから、その城下町として発展したものです。高低差があり坂道や橋も多いです。私は、重慶市規劃展覽館で、重慶が長江と嘉陵江の合流地点にあり、かつて城があったということを学びました。規模は違いますが、友好交流都市である2つの市の地形的な特性が一致していることに驚きました。

都市計画の観点では、大きな違いを感じました。日本には個人所有の土地が多いですが、中国では土地を国などが所有しています。日本では、道路や鉄道の建設が計画されてから、住民説明、交渉、用地買収など多くのプロセスを経る必要があり、実際に完成するまで多くの期間を要します。中には何十年もかかって、ようやく完成するものもあります。



しかし、中国では日本より短期間で大規模な開発が可能です。一方で、より個人の意思を尊重して丁寧に合意形成を行っているのは日本と言えるでしょう。私は、どちらにもメリットがあると感じました。開発のスピード感や、全体の利益の追求という点では中国が優れています。個人的には、日本が中国に学び改善すべき点もあるのではないかと思いました。



今回学んだ中で最も重要なことは、相手を尊重する心は、日本人も中国人も変わらないということです。私は今回の訪問で、多くの中国人の皆さんと交流しました。いつも皆さんには、私たちに優しく接してくださいました。心より感謝しています。私は、四川外国语大学において水戸市を紹介する発表の機会をいただいたほか、重慶市南開中学校においてお礼と感想を述べさせていただきました。その際、日本語を学んでいる皆さんはもちろん、そうでない方も、しっかりと私を見据えて、傾きながら話を聞いてくださったことが強く印象に残っています。

日本は古来より中国から多くのことを学んできました。文字、文化、宗教、社会制度など枚挙にいとまがありません。私は、その点で中国を尊敬しております。その一方で、近現代において

は、中国が、日本を手本にしながら経済成長をしたという側面もあります。重慶軌道交通2号線は、日本の政府開発援助により日本企業の協力の下で建設されたと聞きました。

今後、残念ながら、二国間関係については、悪化してしまう可能性もあります。しかし、人と人との交流は絶やさずにいたいと考えます。重要なことは、これからもお互いを理解し合い、尊重し、学び合うことで、未来志向の関係を築くことではないでしょうか。今回の訪問で出会った皆さんと良き友人であり続けたいと切に願います。



団員への質問

Q. 訪問団に参加する前、中国や重慶にどのようなイメージを持っていましたか？

A.

- ・閉鎖的？日本にいい印象を持っている人は少ない？
- ・危険なところ？（テレビの「衝撃映像」の影響）
- ・長い歴史、広大な面積、パンダ、中国料理（おいしい）
- ・重慶の名前を聞いたことがなかった/重慶を知らなかった

Q. 今回の交流を通して、中国や重慶のイメージは変わりましたか？

A.

- ・街並みや夜景がきれい。人が多い場所でもゴミがなく、きれい。
- ・地域ごとにそれぞれ特色があり、年代ごとに価値観も違う。
- ・人の温かさや、発展している部分を見て、素晴らしい国だと感じました。
- ・重慶の人たちはとても優しくて、何度も助けられました。怖いイメージがなくなりました。

Q. 今回の訪問を通して、何を感じ、何を考えましたか？

A.

- ・報道で知る情報には偏りや限界があるため、実際に自分の目で見ることや現地の人と関わりを持つことが重要であると感じました。
- ・言葉がわからなくとも、文化が違っても、気持ちは通じ合えることを感じました。現地の店のお母さんと、翻訳アプリやジェスチャーを通して仲良くなり、熱いハグとたくさんのお土産を好意でいただきました。また必ず会いに行きたいです。
- ・重慶では、会う人すべてが超エリートだったので、真に優秀な人はこんなことを考えているのか、ということを知ることができました。
- ・重慶の歴史や文化、料理、技術の発展など、たくさんのこと教えてもらうことができて、重慶の良さ、そして友好交流都市の訪問団としてあたたかく迎えられていることを感じられてよかったです。

資料編



友好交流都市重慶市との交流の経緯

(令和 6 年 7 月現在)

【交流のきっかけ】

水戸市と重慶市との交流は、1985(昭和 60)年 3 月に、孫平化中日友好協会副会長(当時)の水戸市への訪問がきっかけとなり始まった。訪問の折、孫平化氏は、水戸市役所敷地内で日中国交回復記念の植樹を行った。

また、同年 5 月には、つくば市にて開催中の科学技術博覧会視察のために来日中の中華全国総工会代表団が、また胡友華氏をはじめとする中国科学技術センター訪日団一行が水戸市を訪れている。

このような交流の中で重慶市との友好親善交流の話が進められ、水戸市の重慶市に対する友好的な考えが胡友華氏から重慶市長へ伝えられて、同年 6 月には、重慶市人民政府対外事務局副主任の辛玉氏から、佐川一信水戸市長(当時)に対して、友好親善交流の推進と訪中の誘いの書簡が届けられた。

翌年の 1986(昭和 61)5 月、佐川一信水戸市長(当時)を団長とする第 1 回水戸市中国行政視察友好訪中団が、北京市、重慶市、上海市を訪問した。北京市においては、中日友好協会会長の孫平化氏や北京市人民政府を表敬訪問して友好親善を深めるとともに、重慶市においては肖秧市長ほか多くの関係者と意見交換を行い、友好親善を深めた。一方、同年 10 月には、重慶市人民代表大会常務委員会副主任の白蘭芳氏を団長とする重慶市代表団が水戸市を訪れ、白蘭芳副主任が、水戸市議会議場にて挨拶を行った。

【全国緑化フェアの成功】

その後、両市の代表団が相互に訪問を重ねるなか、1991(平成 3)年になって、翌々年に開催予定の全国都市緑化フェアへ重慶自然博物館所蔵の恐竜化石を出展することについての要請のために、水戸市の代表団が重慶市を訪問した。続いて 1992(平成 4)年には出展に関する交渉のため、そして、1993(平成 5)年には恐竜化石の梱包を確認するため、それぞれ水戸市代表団が重慶市を訪問した。一方、この間、重慶市代表団も 1992(平成 4)年に 2 度水戸市を訪れ、1993(平成 5)年には、重慶自然博物館の副館長や学芸員、更には重慶市文化局長ほかが訪れている。こうして、重慶市人民政府や重慶自然博物館、そして中国国家文物局の全面的な協力のもとに、水戸市が出展した「恐竜館」が多くの入場者を集め、第 10 回全国都市緑化フェアの成功に大きく寄与することになった。

【活発な人的交流、そして提携への動き】

緑化フェアの成功を経て、1994(平成 6)年 1 月に、岡田広水戸市長(当時)を団長とする水戸市代表団が、恐竜展への化石出展の御礼と交流を深めるため、重慶市を訪問した。

その後、1995(平成 7)年から 1999(平成 11)年にかけて、両市の間で、相互に人的な交流が進められるなか、1999(平成 11)年 11 月に、重慶市人民代表大会常務委員会副主任の馮克熙氏を団長とする重慶市代表団が水戸市を訪問し、岡田広水戸市長(当時)との会談の中で、これまでの両市の交流の経緯を踏まえ、「西暦 2000 年」という節目の年に、友好関係を提携してはどうかとの話がなされた。

【「友好交流都市」の提携】

1999(平成 11)年 12 月に、水戸市日中友好協会から、「重慶市と友好都市締結を求める請願書」が市議会へ提出され、採択されるとともに、2000(平成 12)年 3 月の市議会定例会の本会議においては、重慶市との友好交流都市の提携についての議案が全会一致で可決される。

このような経緯を受けて、2000(平成 12)年 6 月に、岡田広水戸市長(当時)を団長とする重慶市友好交流都市調印使節団 71 名が重慶市を訪問し、友好交流都市提携合意書の調印が行われた。

【友好都市へ向けた交流】

友好交流都市を提携し、新しい関係を築いた両市は、友好都市の提携に向けて様々な交流を行っている。相互訪問はさらに活発なものとなり、2000(平成 12)年からこれまでに、水戸市からは 7 回の訪問団の派遣、重慶市からは 9 回の訪問団の来水があり、両市において交流を深めた。

相互訪問以外の事業として、2002(平成 14)年、水戸市は緑化フェア恐竜館跡地に「重慶広場」を整備し、現在、広場は市民の憩いの場となっている。また、「中国・重慶展と国際交流のつどい」を開催、多くの市民が参加し、重慶市への理解と関心を深めることとなった。そのほか、同年夏、北京において開催された日中国交正常化 30 周年記念日中友好交流都市中学生卓球交歓大会に水戸市・重慶市合同チームが参加し、両市の中学生がスポーツを通じ交流を深めた。

2003(平成 15)年秋には、両市の小学生の絵画、書道作品を展示する「水戸・重慶友好交流都市児童書画展覧会」が水戸市国際交流センターで開催され、多くの水戸市民の目を楽しませた。

重慶市においては、2004(平成 16)年 5 月に、重慶市労働人民文化宮において「重慶市と広島市及び水戸市との友好交流展示会」が開催され、多くの重慶市民が水戸市の児童の書画作品や街の様子を伝える写真パネルなどを通して、水戸市について理解と関心を深めている。

2008(平成 20)年には、水戸市水道部職員が、水道事情の調査を目的として重慶市等を訪問、技術部門の交流の実現に向けて取り組んでいる。

2009(平成 21)年には、水戸市市制施行 120 周年を記念して、アナハイム市及び重慶市の関係者を迎える、これからの中日友好交流について考えるシンポジウムを水戸市国際交流センターにおいて開催し、重慶市側からもパネリストが参加している。シンポジウムでは、「市民主導の交流」をテーマとして、水戸市、アナハイム市、重慶市を代表するパネリストに加え、一般の市民も交えながら、活発な議論や意見交換がなされた。

2017(平成 29)年には、北京において開催された日中国交正常化 45 周年記念日中友好交流都市中学生卓球交歓大会に水戸市・重慶市合同チームが参加し、両市の中学生がスポーツを通じ交流を深めた。

2018(平成 30)年には、重慶で開催された「中国国際スマート産業博覧会 (Smart China Expo: SCE 2018)」における「中国・重慶国際友好都市市長円卓会議」に高橋靖水戸市長が招待され、「水戸市の ICT を活用した教育の推進」について発表した。

2019(平成 31)年には、前年の「SCE 2018」での高橋靖市長の発表内容を受けて、重慶市から教育視察団が来水し、市内の小中学校の教育現場などの視察を行った。

2019(令和元)年の水戸市市制施行 130 周年に際しては、重慶市より使節団が来水し、記念式典への参列及び水戸市国際交流センターの視察などを行った。

2020(令和 2)年には、新型コロナウイルスが世界的に流行する中、流行初期にマスク不足に陥った重慶市に、水戸市から医療用マスク 5 万枚が送られた。その後、水戸市内で医療物資が不足すると、重慶市より同年 6 月に医療用マスク、防護服、体温計などの物資が水戸市に送られた。

同年は、水戸市と重慶市の友好交流都市締結 20 周年にあたり、重慶市での 20 周年記念式典や相互の訪問団派遣、青少年交流、パネル展などが企画されたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、こうした一連の企画はやむなく中止となった。

2021(令和 3)年には、友好交流都市提携 20 周年を記念し、水戸市においては重慶市の紹介展示、重慶市においては水戸市の紹介展示が行われた。

2024(令和 6)年 5 月、重慶市において「国際友好都市協力大会（フォーラム）」が開催され、重慶市からの招待を受けて小田木健治副市長が訪問した。また 7 月には、重慶市において開催された「@重慶@世界『継承と革新、手を携えてともに前進』日本友好都市青少年交流活動」に広島市とともに招待され、水戸市から青少年交流訪問団を派遣した。

日本国水戸市・中華人民共和国重慶市 友好交流都市提携合意書

日本国茨城県水戸市と中華人民共和国重慶市は、日中両国政府による共同声明の精神及び日中平和友好条約にのっとり、平和友好、平等互恵、相互信頼、長期安定の原則に基づき、両市民の永遠の友情及び両市の友好協力関係を更に発展させ、アジア及び世界の平和に貢献するため、両市の友好交流都市提携について下記のとおり合意した。

- 両市は、経済、文化、教育、スポーツをはじめ、各分野にわたって広範な交流を進め、併せて両市の民間交流活動を積極的に推進する。
- 両市は、これらの交流を基礎として、今後友好都市締結に向けて努力する。
- 両市は、それぞれの担当窓口を指定し、これらの窓口を通して具体的な交流項目を策定し、実施する。
- 本合意書は、同等の効力を有する日中両国語により作成し、水戸市議会及び重慶市人民代表大会常務委員会双方の承認をもって効力を発するものとし、水戸市と重慶市双方が各自1通を保持する。

2000年6月6日

日本国
水戸市長

岡田 広

水戸市議会議長

高橋丈夫

中華人民共和国
重慶市長

李毅之

重慶市人民代表大会
常務委員会主任

付
朱列

重慶市青少年文化交流訪問団募集



期 間：令和 6 年 7 月 8 日(月)～7 月 13 日(土) (6 日間)

訪問先： 重慶市（中華人民共和国）

重慶市は、中華人民共和国の長江上流にある直轄市です。3,000 万人以上の人口を有する中国最大の都市であり、西南部における経済の中心地です。

水戸市と重慶市は、2000 年に友好交流都市の盟約を締結して以来、相互の訪問団派遣や青少年交流、市民間の交流を通じて、友好を深めてきました。

この度は、重慶市の招きにより、青少年交流訪問団を派遣します。訪問団は、重慶市で開催されるイベント（「@重慶@世界『継承と革新、手を携えてともに前進』日本友好都市青少年交流活動」）に参加し、重慶市や重慶市の友好都市から集まった同年代の青少年と交流します。

この機会にぜひ重慶市を訪れてみませんか？

募集人員：15 人

対 象：高校生、大学生、社会人など（15 歳以上、35 歳未満であること）

（詳しい応募資格については募集要項を参照）

申込方法：募集要項に基づき、所定の参加申込書・必要書類を持参または郵送（必着）

※募集要項・参加申込書は、水戸市国際交流協会ホームページからもダウンロードできます。

<https://www.mitoic.or.jp/jp/>

受付期間：令和 6 年 5 月 1 日(水)～5 月 15 日(水)

主 催：中華人民共和国重慶市・水戸市・公益財団法人水戸市国際交流協会

申込み・問合せ：公益財団法人水戸市国際交流協会

〒310-0024 水戸市備前町 6-59 水戸市国際交流センター内

（開館時間 午前 9 時～午後 9 時 ※月曜、4/30、5/3、5/7 は休館）

Tel : 029-221-1800 FAX : 029-221-5793



令和6年度重慶市青少年交流訪問団員 募集要項

1 目的

市内の学生を水戸市の友好交流都市である中華人民共和国・重慶市へ派遣し、中国の同年代の青少年との交流を通して国際的な視野に立つ人材を育成するとともに、両市の相互理解と友好親善を深めます。

2 主催

中華人民共和国重慶市、水戸市、公益財団法人水戸市国際交流協会

3 事業概要

(1) 派遣期間 令和6年7月8日(月)～7月13日(土) (6日間)

(2) 派遣先 中華人民共和国 重慶市

(3) 派遣人数 17名程度 (引率の協会職員2名を含む)

(4) 活動内容

ア 重慶市での活動

① 重慶市で開催される「@重慶@世界『継承と革新、手を携えてともに前進』日本友好都市青少年交流活動」への参加

① 重慶市及び重慶市の友好都市等の青少年との交流

④ 学校施設等の訪問・見学

④ その他

イ 事前研修

重慶市での活動を効果的に行うため、事前研修を行います。

ウ 事後研修及びその他の活動

重慶市での活動内容を報告書にまとめるとともに、今後、公益財団法人水戸市国際交流協会及び水戸市の実施する国際交流推進事業に積極的に参加していただきます。

4 募集人数

15名 ※応募の状況により変更する場合があります。

5 応募資格

下記のすべての資格・条件を満たさない場合は、申込みを受付けません。

(1) 令和6年4月1日現在、満15歳以上35歳未満であること

(2) 日本国籍を有し、なおかつ下記の①、②いずれかの条件を満たすこと

①本人又は家族が水戸市内に在住している

②水戸市内に通学又は通勤している

(3) 協調性に富み、事業計画に従って規律ある団体行動及び生活ができること

(4) 派遣前後に行われる研修に参加し、派遣後も公益財団法人水戸市国際交流協会及び水戸市の国際交流推進事業に積極的に参加できること

6 応募方法

(1) 提出書類

※ア(参加申込書)は応募者の自筆とする。ただし、応募者本人が応募時点で18歳に満たない場合、アの裏面(承諾事項)の保護者記入欄は保護者の自署とする。

※提出書類は、すべて黒のボールペンで記入すること。

ア 参加申込書(様式第1号) 1通(裏面の承諾事項を含む)

イ 応募者本人の年齢が確認できる公的書類の写し[下記一覧の「A」の書類(いずれか1点)]

ウ 水戸市内に居住もしくは水戸市内への通学又は通勤を確認できる書類の写し

①本人または家族が水戸市に居住していることを確認できる書類の写し

[下記一覧の「B」の書類(いずれか1点)]

※本人以外の確認書類の場合は、本人との続柄を欄外に明記すること

②水戸市内への通学・通勤を確認できる書類の写し[下記一覧の「C」の書類]

【確認書類一覧】

・パスポート[A・B]

- ・運転免許証(表裏両面)[A・B]
- ・マイナンバーカード(表裏両面)[A・B]
- ・住民票[A・B]
- ・健康保険証[A]
- ・学生証／社員証／在学証明／その他、学校・会社等が発行する在籍証明書類[C]

※AとBを兼ねる書類の場合、提出は1部のみで可

- (2) 提出期間 令和6年5月1日(水)～5月15日(水)
- (3) 提出方法 直接窓口に持参又は郵送すること。 **※郵送の場合は必着**
- (4) 提出先 公益財団法人水戸市国際交流協会

7 団員の決定

先着順を原則としますが、応募多数の場合は、中国への渡航歴がない方を優先します。

参加可否につきましては、5月21日(火)までに申込書に記載いただいたメールアドレスにお知らせします。

8 スケジュール

6月 29日（土） 午前10時～正午	結団式及び事前研修
7月 8日（月）～ 7月13日（土）	重慶市へ派遣
7月 21日（日） 午前10時～正午	事後研修及び報告書作成

※結団式及び事前・事後研修は、水戸市国際交流センターにて行います。

9 費 用

この事業に要する費用のうち、次に掲げる費用は、参加者の個人負担とします。

- (1) 水戸市～日本国内空港間の交通費等（主に自宅～集合/解散場所の交通費）
※日本国内空港～重慶間の交通費、重慶市滞在中の宿泊費、食費、交通費、その他活動に関わる費用は重慶市が負担します。
- (2) 自由行動時の個人的な費用
- (3) 海外旅行保険料
- (4) その他疾病又は傷害の治療費用

10 訪問団員の取消し

訪問団員として決定された後であっても、不適格と認められる行為又は事実があった場合には、資格を取消すことがあります。

11 旅行の取消し

派遣決定後、事業への参加を取りやめたときは、旅行約款に基づく取消料が発生します。キャンセル分の費用に関しては、重慶市は負担しませんので、日本国内空港～重慶市間の交通費、重慶市滞在中の宿泊費、食費及び交通費相当分の一部または全額を負担していただく場合があります。

12 個人情報の取扱い

応募書類に含まれる個人情報については、当協会の個人情報保護規程に基づき厳重に管理し、本事業に付随する業務のために利用します。

応募先/問合せ先	公益財団法人水戸市国際交流協会
〒310-0024 水戸市備前町6番59号	
水戸市国際交流センター内（開館時間 午前9時～午後9時 ※月曜日・4月30日・5月3日・7日は休館）	
TEL : 029-221-1800 FAX : 029-221-5793	
E-mail : mcia@mito.ne.jp ホームページ : https://www.mitoic.or.jp/jp/	
※本派遣事業は渡航者の安全確保を最優先せますので、今後の国際情勢によっては、応募後であっても中止する場合があります。	



令和 6 年度重慶市青少年交流訪問団報告書

発行日 令和 6 年 11 月

公益財団法人水戸市国際交流協会

水戸市備前町 6-59 電話 029-221-1800

※今回の報告書に関するお問合せはこちらへ